

## 教員の定年後生活（第6報）

— 教員共働き家庭に於ける役割分業と家族関係 —

共立女大 ○細江容子 横浜国際福祉専門 竹田久美子 群馬大 長津美代子  
お茶女大 大塚洋子 袖井孝子 大修館書店 福島裕子

【目的】ここでは、男女が同程度の収入と労働時間を持つ教員共働き家庭の男女がどのような役割分業によって、子育てや介護などの問題を乗り越えてきたか、また教師であることが親子関係や夫婦関係にどのような影響を与えたかについて、事例を中心に分析することで、教員共働き家庭の役割分業と、家族関係についての特色を捉えることを目的とした。

【調査方法】第5報に同じ

【結果】事例調査の結果の分析から、以下の事柄が要約できる。

①この年代（50～60代）の教員共働き男女では、当時受けた教育の問題もあり、性別分業意識が強いケースが多く、子育てなど家庭での仕事もほとんど女性が担当しており、男性の協力は少ないといえる。②女性は仕事と家事・育児との両立のため自分や配偶者の親と近居や同居等により、何等かのかたちで親族からの援助を受け仕事を継続しているケースが多いといえる。③当時は保育所等での公的サービスが十分ではなく、私的保育サービスに頼ることは、経済的に大変であったため、親族の援助は欠かせないものといえ、経済的要因によって親族の援助を頼るケースも多いといえる。④教員と言う職業は他の職業と異なり、特に地域社会との関係が強い地方においては、子や親が教師であることへのプレッシャーを強く感じるケースも少なくないといえる。